



知られざるジャパノロジスト —ローエルの生涯—

宮崎正明著

丸善ライブラリー

1995年2月, 245頁, 680円

読み物

お薦め度

☆☆☆☆☆

この新書によってローエルの日本研究がひろく知られることとなり、大変うれしくおもう。アメリカの天文学者パーシヴァル・ローエルは実はその人生の前半を明治時代の日本人と日本文化の研究にささげた第一級のジャパノロジストでもあった。その重要性にもかかわらず、いわゆる「お雇い外国人」たちにくらべて、今まで詳しく紹介されてこなかったのは遺憾に耐えないと著者はいう。この歴史の盲点が本書によって埋められる。とくにローエルの撮った明治の日本と朝鮮の写真49葉がおさめられていて強い印象をのこす。

著者はローエルの明治22年の能登旅行の紀行「NOTO—一人に知られぬ日本の辺境」(十月社)の翻訳によって日本翻訳文化賞を受けられた、金沢工大の英語の先生である。詩人である著者はローエルの歩いた道を自らの足でたどり、10年あまりかけて流麗な日本語訳された。ローエルへの思いが溢れたこの情熱によって、一連のローエル再評価の動きをつくりだされ、御自分の人生をそれに重ねられている。

本書の後半は天文書的で、ローエル天文台設立、火星観測、火星人説の論拠、冥王星の予言と発見にあてられている。欲を言えば、同天文台のV. M. スライファーによる渦巻き星雲のスペクトル線の赤方変位の発見についても触れてほしかった。これこそ同天文台の最大の功績であり、現代ビッグバン宇宙論のはじまりとなったものである。小さいながらこの私立天文台はよくやった。

前半の日本滞在時代に著者の本領が発揮されている。ローエルは明治17年にボストンから東京にやって来た。朝鮮からの遣使使節団の秘書官をつとめたので処女作は「朝鮮—朝の静けさの国」

(趙慶哲博士が韓国語訳されたと聞く)である。つづいて出た「極東の魂」(川西訳, 公論社)はローエルの主著で、西洋からみた日本人論の基本となった。この本はラフカディオ・ハーン(小泉八雲)を感激させて日本渡航を決意させたというのでも重要である。

明治17年に朝鮮では甲申の変がおき、かつての訪米団のメンバーも二派にわかれて殺しあった。ローエルは日本の竹添公使の情報で「コーリアン・クーデタ」を雑誌に書いた。また明治22年に森有礼文部大臣暗殺事件がおきると、その報告を「ある日本改革者の宿命」として寄稿した。

能登旅行は本書のもっとも力の入った部分で、すでに述べた通りである。読者はここで十分楽しむことができる。あらためて訳書をもとめたいかならう。

ローエルの日本についての最終作は「オカルト・ジャパン」である。これはハーンの日本についての第一作と同年に出た。木曾御岳行がもとになった神道研究であるが、ここの詳しい記述は訳書のない現在では貴重なものとならう。

こうしてローエルの強烈な好奇心と探究心の追及の産物をまとめて読む機会が得られたのだが、のちの天文学の追及をおもいあわせて、彼はなんと魅力的な快男児であったかとおもわざるをえない。じゅうぶん研究にあたいする人物だ。

日本ローエル協会をつくる話が能登の穴水町当局を中心にすすんでいると聞く。期待したい。参考書として、佐藤利男「星慕群像」星の手帖社1993、横尾広光「地球外文明の思想史」恒星社1991、1995をあけておく。

横尾広光(杏林大学保健学部)